

《資料》

一般教育科目の授業の反省

神 立 春 樹

目 次

- 1 一般教育科目の担当経過
 - (1) 一般教育科目の担当経験
 - (2) 授業上の工夫
- 2 1985年度一般教育科目「経済学B」の授業の反省
 - (1) この講義の概要
 - (2) ペーパー記入「この授業を履修して」抄録
 - (3) 指摘される本講義の特徴点
 - (4) 授業に対する学生の姿勢
- 3 滲み出る学生像

1 一般教育科目の担当経過

(1) 一般教育科目の担当経験

1970年以来岡山大学経済学部（着任時は法文学部経済学科）の教員として勤務してきた間、一般教育科目の経済学を担当したのは、1980年度（後期）、1984年度（後期）、1985年度（前期）の3年度・3回であった。1994年10月に教養部が廃止されるまで、教養課程の授業科目の担当部局は教養部であり、教養部の教官が主として担当し、各学部が応援するというかたちをとっていた。経済学についていえば、教養部と経済学部の間で一コマの乗り入れを行ない、経済学部から毎年一コマの教養課程一般教育科目経済学を担当することになっていた。1980年度のもの部局間の申しあわせにもとづくものであ

り、1984年度と1985年度のものは、それ以外の事情にもとづくものである。

当時は講義は通年4単位であったが、私の場合はいずれも他の担当者との分担で、半期のみであった。1980年度は経済学Bという科目で、私が後期不在となるため渡辺基教授との2人での、工学部1・2年、教育学部1・2年を対象とする二コマの授業で、「前期（神立）は戦前日本資本主義の構造的性質を産業資本確立期を中心に検討し、後期（渡辺）は戦後日本資本主義の高度経済成長とその後の構造的危機について考察する」（『昭和55年度教養部便覧』）と記してある。

1984年度と1985年度は、1984年8月から1985年7月の1カ年間の在外研修で不在となる源河朝典教授との分担であった。1984年度は通年ものの後期二コマであった。一つは経済学Aで、教育学部1・2年を対象とするもので、講義要項は「（前期：源河）『経済体制』に焦点をあてて、現代の資本主義および社会主義への経済学のアプローチの仕方を紹介・検討したい。教材などについては追って伝える。（後期：神立）『地域』に焦点をあてて、資本主義社会における中央と地方、都市と農村の関係を、経済史学の方法を援用しつつ、経済学的に考察する。その際、『地域』としては具体には岡山県をとりあげる。教材はプリントによる」と記してある。もう一つは、工学部1・2年を対象とするもので、「（前期：源河）技術と経済、技術と社会、総じて技術と人間のかかわりについての経済学上のいくつかの考え方を紹介・考察する。教材などについては追って伝える。（後期：神立）日本における資本主義化・工業化の過程を、近代技術導入の問題に焦点をあてて考察する。テキスト（神立）海野福寿編『明治社会と技術の導入』（技術の社会史、第3巻・有斐閣）」と記してある。（以上『昭和59年度教養部便覧』）

1985年度は、通年ものの前期担当二コマであった。一つは経済学Aで、教育学部1・2年対象で、「（前期：神立）人類の経済制度の変遷とそこにおける資本主義経済の位置と特質を考察する。テキストは使用しない。参考文献は講義をすすめていくなかで順次指示する。（後期：源河）『経済体制』に

焦点をあてて、現代の資本主義および社会主義への経済学のアプローチの仕方を紹介・検討したい。教材などについては追って伝える。」、もう一つは経済学Bで、「(前期：神立) 日本近代における経済の発達と教育の関連を考察する。テキストは使用しない。参考文献は講義をすすめていくなかで順次指示する。(前期：源河) 技術と経済、技術と社会、総じて技術と人間のかかわりについての経済学上のいくつかの考え方を紹介・考察する。教材などについては追って伝える」という内容である。(以上『昭和60年度教養部便覧』)

(2) 授業上の工夫

担当した授業の概要などは以上であるが、内容は「戦前日本資本主義の構造的特質を産業資本確立期を中心に検討」(1980年度工学部, 教育学部), 「『地域』に焦点をあてて、資本主義社会における中央と地方, 都市と農村の関係を, 経済史学の方法を援用しつつ, 経済学的に考察する。その際, 『地域』としては具体には岡山県をとりあげる」(1984年度 経済学A: 教育学部), 「日本における資本主義化・工業化の過程を, 近代技術導入の問題に焦点をあてて考察する」(1984年度 経済学B: 工学部), 「人類の経済制度の変遷とそこにおける資本主義経済の位置と特質を考察する」(1985年度 経済学A: 教育学部), 「日本近代における経済の発達と教育の関連を考察する」(1985年度 経済学B: 教育学部), というように, 同じ経済学であっても, 対象となる学部によってそれに相応しいものになっている。またテキストも工夫しているのである。

1984年度の後期授業は前期担当者が在外研修で海外出張するために7月半ばで終了し, 10月からの後期授業開始までの長い空白があった。しかも後期から担当者がかわったため, 学生たちはとまどったであろう。授業がスムーズになるのに余計に日時がかかった。プリントでの授業(教育学部対象), テキストによる授業(工学部対象)をすすめるなかで, 大きく雰意気がかわったのは, 附属図書館に連れていき, 資料を使って講義内容を確かめさ

せるようなことをしてからである。教育学部の学生を対象とする授業では、『岡山県統計書』によって、明治・大正期の産業や社会の状況について確認させ、工学部の学生を対象とする授業では、『帝国統計年鑑』や『農商務統計表』によって明治期の工業の状況について把握せしめた。回数はいずれのクラスも2回であった。

授業終了時に「この授業を履修して」という文章を提出してもらった。「予想外であったこと—それは図書館の利用であった。恥しながら私は大学図書館をあまり利用しない。それだけに明治42年の岡山県の資料などを調べて図書館のよさを知ってしまった。(これに関してはこれから卒業製作の時などにも利用することになる)」（O・I）、「予想外であったのは図書館の見学であったが、とかく講義だけで終わりがちな大学の授業が見学や資料をみたりでとても新鮮なものになった。人数がかなり少なかったせいか、しっかりと顔を覚えられてしまって恥しかしかったが、神立先生のおかげで大学の先生が身近に感じられ、何やらイメージが一新したように思える」（K・K）、「また授業で図書館へ行ったのは印象的であった。私にとっては岡山大学の図書館へ入ったのは実に2回目であった。最初は先生の意図が読みとれずとまどったけれどもまあいう授業も新鮮でよかったと思う」（O・A）などと記している。

この図書館利用を翌年はより積極的に取り入れていくこととなる。

2 1985年度一般教育科目「経済学B」の授業の反省

(1) この講義の概要

前述のように、1985年度は、前期に一般教育科目経済学を二コマを担当した。二コマでともに教育学部の学生を主対象とするもので、一つは一般的なことを内容とするA、もう一つは、やや特殊なBであった。

前者は、序、第1章人間社会成立・発展の基礎、第2章人類の経済制度の

変遷，第3章資本主義の位置と特質，第4章日本の資本主義という構成であった。第1回（4月16日）はオリエンテーション，第2回（4月23日）序と第1章，第3回（4月30日）第2章，第4回（5月7日）・第5回（5月21日）・第6回（5月28日）第3章，第7回（6月4日）・第8回（6月11日）・第9回（6月18日）・第10回（6月25日）第4章で，第11回（7月2日）・第12回（7月9日）は附属図書館につれていき、『日本帝国統計年鑑』により，明治期における工業の状況を確認せしめた。7月9日にはあわせて夏期休業中の課題として，長岡新吉『産業革命』を読み，レポートを9月17日に提出することを課した。夏休みあけの第13回（9月17日）は課題としての長岡新吉『産業革命』を読んで」というレポートを提出させ，提出されたレポートにもとづき討論，第14回（9月24日）はレポートを手かがり第4章の取りまとめを行った。第15回（10月1日）は試験を行なった。

後者は「日本近代における経済の発展と教育の発達との関連を考察する」と内容表示を行った。ここでは，この「経済学B」の授業の経過を整理・反省し，私自身の授業のあり方についての検討の一資料としたい。また，経済学教育，さらには大学における教育についての論議の一素材となることを期してのものである。

講義の章節別構成はつぎのとおりである。

序論 この授業（前期）の課題

第1章 日本資本主義史の概観

第2章 資本主義の発展と教育

第1節 近代日本の成立と教育

第2節 日本資本主義の確立と教育

第3節 日本資本主義の発展と教育

第4節 戦時体制と教育

第3章 資本主義の発展と教育—その二—戦後教育の諸問題

この講義の日本資本主義の発展の部分は私の経済学部における担当科目である「日本経済史」の講義ノートを採用し、教育の展開の部分については、文部省編纂の『学制百年史』、『学制百年史 資料篇』を軸として組み立てていった。パッシン『日本近代化と教育』、カミングス『ニッポンの学校』などの外国の人々によるものにも目を通して見た。なお、経済学から教育を論ずる視点としては、いわゆる教育投資論があり、1962年11月発行の「教育白書」である『日本の成長と教育—教育の展開と経済の構造—』がこの観点からのものであり、このような教育の経済学的分析に関する二、三の文献も手許に置いたが、ここではこのような観点よりも、史的発展そのものの問題として検討した。

第1回め（4月10日）はこの授業のオリエンテーションで、「教養部便覧」の記載の解説と履修上の心得を述べるにとどめた。第1章には4回をあて、第2章には5回めの後半から13回めまでをあてた。ここで夏期休業となり、第3章は休みあけの9月の2回であった。この間に、6月26日、7月3日、9月11日の3回学生を図書館に連れて行き、『帝国統計年鑑』、『岡山県統計書』による学習を行なった。また、夏休みの課題として、森嶋通夫『イギリスと日本—その教育と経済—』（岩波新書）を読ませ、9月11日にそのレポートを提出させた。第3章は実質1回で、森嶋氏の著書に提起されている日本の教育の問題についての見解を手かがりに話をするにとどまった。森嶋氏の書物に書かれているイギリスの個性尊重教育はすばらしいことであるが、それはイギリスの長い歴史と社会の上に成り立っていること、日本はかつてはイギリスと同様に複線型であったが、戦後の改革で単線型となったこと、戦後の教育がもたづけている教育基本法はすぐれた理念を示すものであること、今日いわれている個性尊重はいわれるがごとく機会均等と矛盾するものとしてでなく、両者の統一を追求すべきことを、私の考えとして述べ、教員となる諸君がこれからこの問題を考えつづけてほしいと要望した。

履修者名簿には38名の記載があった。初めから一度も出席しないか、早々

に放棄したかの者4名，夏休後出席しなくなった者1名，レポートを提出したが，試験を受けなかった者1名で，試験を受けた者は32名であった。この32名は，1982年度入学1，83年度入学1，84年度入学17，85年度入学13名で，所属学部は1982年度入学生が理学部であるほかはすべて教育学部である。なお，前年度の後半担当した「経済学A」を履修した学生が4名いた。試験を受けなかった者は評価不能とした。通年の講義の評価は年度末に行なうことになっていて，前期は合格をA，要注意をBとする評価方法にしたがい，レポート，3回にわたる図書館での実習の学習結果にもとづいて，試験を受けたもののうちレポートを提出しなかった1名はBとし，ほかの31名はAとした。試験時間には，「この授業を履修して」というペーパーを書いて貰った。「この授業でなにを考え，なにが得られたかということを含み，自由に」と補足した。

(2) ペーパー記入「この授業を履修して」抄録

「この授業を履修して」という小ペーパーで学生たちの書いたものの中から，そのいくつかを抄録してみよう。

「この授業が他の授業とかわっているなと感じたのは，まず出席をとるのに要する時間が長いこと。一人一人の名を呼ぶだけでなく『この連休はどうやって過しましたか?』とか『夏休みはいかがでしたか?』とか，先生とのコミュニケーションのあるのにはちょっと驚きました。次に変わった点は図書館へ行って一人学習をすること。……『授業で学習したことを資料で確認してください』ということで，特に何年についてとか，どの事件，法律についてとかテーマを与えられなかったために自由に学習できた反面，テーマを見つけるのも一苦勞。夏休みの課題でイギリスの大学教育について読んだとき，先生の出席や図書館学習がこの点を取り入れたものであることとその意図がわかりました。課題のレポートにも書きましたが個性尊重教育の重要性を知るとともに，『日本の教育がよいから経済が発展したわけではない』の

だということも知りました」(K. H)。[この学生は、授業の初めの履修者票の「いま関心のあること」という問に対して、「いま特に関心のあることはありません」と記していた]

「この授業を履修してみてもまず一番感じたのは、やはりこの授業のテーマであろう。“経済と教育との関係”である。しかし夏休み前に講義中で先生がお話して下さったことは、自分自身の頭の中であまり理解できていなかったようだ。“百聞は一見に如かず”というか、やはり先生の講義を聞いてノートをとるだけでなく自分自身の手で調べたり読んだりすることは大切なことである。そういう意味において図書館にいったの調べ物や夏休みのレポート課題の内容は私の頭の中にずっと残っている。特に夏休みのレポートなどは最初は全く興味のなかったことなのに、おもしろい内容につられてあっというまに読んでしまった自分に驚いている。感想はレポートに書いたとおりであるが、このレポートではたくさんのことを考えさせられた。そしてここにきてやっと夏休み前の講義とこの本の続き具合がわかりかけてきたのである。前期の授業を受けてみて経済の発展と教育とは密接に関係があるのだなあということについて深く考えさせられた。……私達の教育した世代が経済を司る時には私達の教育方法がそこに反映されるのである。そう思うとすごく責任を感じ、がんばらなくてはと決意を新たにした。この授業を履修して、以上のようなことを考え、そして自分自身で動いて知識を広めることの重要性を得ることができた」(I. K)。[同じく、「去年からゴルフ部に入ったので、早くゴルフがうまくできるようにと、今熱中しています」]

「最初のころは全く知らない人ばかりだし、経済学ってむずかしそうだったので、履修することにしたのをくやんだりしました。でも、講義があるたびにだんだん内容に興味をわいてきて、先生が対話式の講義を取り入れたらしたので、今では経済学を履修してよかったと思います。友人は『政治学の方が楽勝なのにどうして経済学なんかとるん?』と不思議がっていました。私は少々ガンコなので楽であろうが苦であろうが、自分のやりたいことをや

る主義です。神立先生の個性尊重教育観には同感ですし、先生の考え方を講義で聞かされた時に自分に自信がもてました。みなと同じ科目を履修して〇〇先生の講義を履修してというように主体性のない人が多いのにはびっくりしています。私は、自分の考えで行動するのは協調性がなく、自己中心の人間とかわれるので、少々自分に自信がなかったからです、でも、先生の講義に出席して、個性は大切なものだと分かりました。個性とわがままをごったまげにしている人も多いので、私はそうならないように行動していきたいです。……経済学についての知識がふえたとともに、人生観の勉強になった講義でした」(H. N)。[同じく、音楽の本を読んだり、勉強したりしたい、「バイオリンをやりたいが、オーケストラという楽団に入るのがイヤで、……結局まよっています」など]

「この授業を履修して、経済学というより教育関係という知識が前より増えた。特に印象深かったのが図書館へ行って資料を見たことです。今まで、そのような本を見たことはないし、見ようと思ったこともなかった。だから最初はあまり気がしなかつたけれど、見ているうちにいろいろな発見があって楽しかった。資料をみてやはり岡山県は今も教育熱心だけど昔も教育熱心だったのだなあと確認できたし、意外だったのは新潟県でなかなか学校数や生徒数が多かったみたいだった。また夏休みの課題も私にとってプラスになったと思う。夏休みの最初読もうと2, 3ページ読んで、1カ月ほどそのままになってしまいました。これではいけないと思い読みすすむと、なかなか興味が出てきて今度はスラスラ読めました。読み終えて思ったことは、勉強に対する生徒の考えが違うなと思いました。私もだったけれど、日本の生徒は受身で勉強している。もっと興味・関心を持って自由に伸び伸びと勉強ができたらと思う。いずれ教師になろうとしている一人である私の今後の課題なのかもしれないと思っている今日このごろです。それに、この本を読んでなぜか勉強意欲が出てきて、残っていた夏休みのレポートをバリバリやりました。この感じは何なのだろうと思っていましたが、私も

勉強に対する意識が変ってきたのだ。うーむ成長している！などとたわごとを考えていました。とにかくこの授業は大学の授業の最初のものであったし、神立先生の雑談も楽しみにしてたし、それに特に先生の授業方針といったことに共感を覚えたので、まだまだ受身的でしたけれど得たものは“大”でした。考えたことといたら、英国と日本の教育制度の違いですけど、これはもっと考えてみたい、というより英国でじかに味わってみたいなどと思い始めています」(S. K)。[同じく「学生生活」と記していた]

「まず、神立教官の授業のなかで特に印象に残ったものは、なんと言っても図書館へ行って、『帝国統計年鑑』・『岡山県統計書』などの資料を自分自身で触れて、糸をとき調べられたことである。考えてみればこれは非常に尊い体験であったと思う。講義で教官のおっしゃることをそのままノートに記録するのではなく、過去の実際の統計書を見て、そこからその年代の事実を自分の目でくみとるという作業は、私は生れてはじめてであったし、そうそうみんなが体験できることではなかったであろう。何よりも神立教官のそういった生きた経済学の形態は、教育者を目指す私には一番勉強になったのだ。それから蔵書が少ないと思っていた図書館が、実は書庫にあんなにたくさんの本があり、しかも日本有数の図書館であることもわかった。これからしっかり図書館を利用しようと思う。……教官はこの講義が教育学部の学生が多いのに目をつけ、日本の経済成長と教育制度の変革が深く結びついていることをについて講義して下さった。それから、最後の講義も印象深い。一戦後教育の機会均等、単線化は、森嶋通夫氏の『イギリスと日本』では個性喪失に通ずると述べてあったが、それはむしろ機会均等の中に個性尊重を見出すことこそ本来であるという、教官のあの意見である。私はあの言葉を聞いたとき、はっと開眼させられた。私自身義務教育の中で個性尊重を守られたからこそ、ここにこうして一岡大生として存在しているし、私が教師になったなら、そういう安定した環境の中で子供の一人一人の能力を一人一人についてのばしてやることのできるのだと」(F. E)。[同じく「子供(幼年

期・小学校期)の成長とそれに影響を与える大人(親・教師)の行動。いったい自分は何になりたいか(今の教育体制のもとでただ成績にあった近くの学校に進んだもので、19になってもよくわからないのです)」など]

(3) 指摘される本講義の特徴点

以上、この授業の受けとめ方については、そのいくつかの例をあげたが、そこで述べられていることがらについて吟味してみたい。

① 授業のテーマ

まず第一は、授業のテーマである。先ほどの引用文に、「この授業を履修してみてまず一番感じたのは、やはりこの授業のテーマであろう。“経済と教育との関係”である」、「教官はこの講義が教育学部の学生が多いのに目をつけ、日本の経済成長と教育制度の変革が深く結びついていることを」とりあげたという、この授業のテーマそのものである。このようなテーマでの経済学の講義についての学生たちの言及をさらに引用してみよう。

「教育が経済に影響を及ぼすということ自体知らずにおりました。この授業においてそのようなことを、初めて知ったわけですが、考えてみれば、理解出来ることがほとんどだったようです。あまり経済にはふみこまなかった様ですが、経済学ではなく日本教育史の授業を受けていたような感じをした人は他にもいると思います」(H. A), 「この授業の視点『経済と教育の関係』というのは、大学に入って2年間一度も考えたことのない視点であり、履修することにした(B. K), 「この授業にでるまで、僕自身『経済学』というものだからむつかしくかかれた経済書を読んで、いったいゴチャゴチャとした数字計算をするのだらうと思っていましたが、授業にでてみると、あまり経済一本やりでやるのではなく、経済と教育というものを関連づけながら、すすめていくということだったので、僕にとっては、はいりこみやすい気がした。しかし、そうはいったものの、経済と教育とは一見すると別のもののような気がしたので、神立教官がそれをどのように関連づけて講義され

るのかということに、とても興味があった」(I. K),「講義内容を読んで『おもしろそう』という気持ちでこの講義を受講しました」(K. Y),「高校の時も『経済』の教科は習っていなかったので、この講義を受ける前はきっといろいろな国の経済状況や貿易など難しいことがたくさん出てきて覚えることはたくさんあるだろうと覚悟していましたが、実際講義を受けてみるとぜんぜんかた苦しい内容でなくテーマも僕らに関係の深い教育についてとてもリラックスして講義が受けられました」(W. Y),「この授業では『教育』との関連の上で授業が展開されており経済といったものにあまり関心とか興味の薄い私などにも案外おもしろい授業だなあと感じられました」(T. M),「普段触れる事のなった“経済学”の授業でしたので、自分にはあまりとっつきがよくないように感じてましたが、実際講義を受けて、教育との関わりなども学べ、仲々興味深い面があることを発見した」(N. A),「私の一番興味・関心があったのはやはり教育についてのことでした。経済学といえば、この前半の授業のように、資本主義のこととか、流通のことなどばかりだと思っていました。資本主義の発展と教育を結びつけて考えることは、苦手な資本主義についても興味ももて」た(H. H),「この授業を受けてまず驚いたのは今まで考えてもみなかった視点、つまり経済と教育との深いかかわり合いでした」(B. C),「“経済学”とはいっても、経済のことだけでなく教育にまで及ぶ広範囲の講義だった。経済学というのは、“産業”とか“〇〇業”“貿易”等々の言葉がいっぱいのもつまらないものじゃないかな、というイメージを持っていたけれども、実際は経済は全ての根本事象であると思えた」(M. M),「経済についてだけではなく、教育と経済の発展についての授業だったので、興味もあったし、たのしく勉強ができたと思います」(I. K),「経済と教育との関連について勉強したが、私は、主に教育についてその歴史を学ぶことがとても勉強になった」(S. Y),「日本資本主義の発達と教育ということで、いったいどんな内容なんだろうかと好奇心でいっぱいでした。将来教師を目指すものとして経済と教育とを結び付けて考えることに

興味を覚えました」(T. R), 「“経済学”というとなにかむつかしそうな感じがして、履修する前は実は不安でした。でも実際講義がはじまってみると、主に“資本主義の発展と教育”という観点からの講義であり、なかなか興味をもって聴けたと思います」(N. Y), 「この授業を履修した理由は、特に経済に興味があったからというわけではなく、教育との関係を重点においた経済の講義をしてくれるということだったからだ。教育学部に在籍している私にとって一番興味関心あるものといったらやはり教育であった。ただ単に経済学を学んでも将来あまり役に立たないかもしれないと思っていたが、教育と関連づけた経済学となると話は違ってくる。数ある経済の講義のなかでこの講義のように教育と関連づいた経済の講義があったことを私はうれしく思っている」(M. M), 『『経済と教育』という形での授業だったので、あまり経済をやっているという気がしませんでした。どちらかといえば教育が中心だったのではないかと思います」(O. M), 「経済なんて、むつかしいと思っていたけれど、教育を中心もってきて、とても興味もててよかったと思いました」(H. Y)。

以上のようなものがあるが、このような記述からつぎのようなことを受けとめることができようか。第一に、経済学についてのあるイメージのあることである。むつかしい、むつかしそうな感じ、関心・興味が薄い、ゴチャゴチャとした数字計算、産業とか、〇〇業とか、貿易とかの言葉がいっぱいのもつまらないもの、特に興味があったわけではない、などである。経済学ばなれの進行の風潮がここにもあらわれた表現といえよう。なかには、なにになの方が楽勝なのにどうして経済学などとするのかといわれ、本人も「最初のころは全く知らない人ばかりだし、経済学ってむずかしそうだったので、履修することにしたのをくやんだりし」たということとて、大いに動揺したであろうが、とることにしたからとるということでつづけた、という例(H. N)もある。第二に、そのようなイメージをもって、あまりとりたくないけれども履修したというのは、必要な単位をそろえるためにということから、時間

割表の都合でとらざるをえないということが大きな動機であろう。そして、教育学部の学生を主対象としていることからあげたテーマに手がかりをもとめ、期待をつないでの選択があったということであろう。第三に、このような受講学生たちの関心・興味をひくことにしぼったテーマをたてたことの結果は、経済学というより教育関係というか知識が前より増えた、あまり経済にふみこまなかったようで、経済学というよりは日本教育史の授業をうけているような感じ、主に教育についてその歴史を学ことがとても勉強になった、というような教育史・教育問題を考える授業という印象を少なからず与えた授業となっている。あるべき経済学の授業ということからすると疑問が提されるであろう。しかし、この点についていえば、「高校の頃までは経済というものは、自分にはほとんど関係なく上のほうでうごめいているという考えがあった。が、今一年半経済学を学び、今日教育との関連を学び興味をもちだした経済が、よりいっそう身近に感じられ、このなにも経済は自分たちに関係しているかと思った」(F. N)ということをはじめとして、教育を経済の発展と深くかかわらせて考えることが必要だということを大方が受けとめたことから、このようなテーマでの授業が実は経済学に関心をもつきっかけとなっていることは明らかである。さらには、経済学にはあるイメージを持っていたが、「実際は経済は全ての根本現象であると思えた」という、社会科学としての経済学の復権を示しているといえるこの一言を、発せられるであろう疑問に対する明確な解答としてあげておきたい。第四に、以上は経済学にやや違和感をもつ学生たちの対応の経過ということになるが、少ないとはいえ経済学そのものに関心をもつ学生も存在している。最初経済学Aだと思って出たが、Bだといわれて、どうしようかと思ったが、テーマがテーマだったので、履修することにした、というものもそうであるが、経済には大変興味があったので、できればもう一つの方の経済学Aをとりたかったけれども、他との関係でこの授業をとることにした、というものがある。この二人は、それぞれ、「私は3年生で長く教養にいます(おはずかしい)が、久し

ぶりに(?) おもしろい講義でした」(B. K), 「この授業を履修していちばん感じたことはこの経済学の授業を選んで本当によかったということです。……そしてひとりひとりの能力を伸ばし、人間的成長をはかれるような、より良い教育を目指したいと思います。そのためにも4年間しっかり学びたいと思います」(T. R), と記している、このようなテーマでのものであっても積極的に学んでくれているが、それにしても経済学そのものへの強烈な関心・興味のあることは心づよいことである。一方での「経済学」に違和感をもつ学生が増加しているなかで、このような積極的な学生も健在である。「この授業を履修した理由は、特に経済に興味があったからというわけではなく、教育との関係を重点においた経済の講義をしてくれるということだったからだ。……数ある経済の講義のなかでこの講義のように教育と関連づいた経済の講義があったことを私はうれしく思っている」ということとともに、経済学そのものへの期待もあり、求めることの多様性を改めて示している。このような多様性こそが多くの可能性を思わせるのであり、これに対して創意と工夫にもとづいた授業を試みていくことが課題といえよう。

② 図書館の活用

第二は、図書館を使つての授業である。「特に印象に残ったものは、なんと言つても図書館へ行って、『帝国統計年鑑』・『岡山県統計書』などの資料を自分自身で触れて、糸をとき調べられたことである。考えてみればこれは非常に尊い体験であつたと思う。講義で教官のおっしゃることをそのままノートに記録するのではなく、過去の実際の統計書を見て、そこからその年代の事実を自分の目でくみとるという作業は、私は生れてはじめてであつたし、そうそうみんなが体験できることではなかつたであろう。何よりも神立教官のそういった生きた経済学の形態は、教育者を目指す私には一番勉強になつたのだ」という先の引用例にあつたこの図書館利用についての言及についてさらにみよう。

「ところでこの授業で図書館へ行ったことで、“書庫”という珍しいもの

を知った。気のせいかもしれないひんやりとした気持のいい所だ。でも、いかにも大切そうな古い本がたくさん並んでいて、正直いって、あまり楽しそうな本はないようだが、少しインテリの気分になって面白かった」(S. K)、「図書館での実習について、他の先生方がそういうことをしているという話はあまりききません。しかし1時間弱ではあまり深くは調べられず、少し残念です。まあ、少なくともおもしろい時間でした」(H. A)、「というやはすかいにかまえた表現から、「講義中に、図書館へ行って自分自身で統計年鑑をみて、その内容を分析考察してレポートするということに対して、僕自身たいへん興味をもった。今までに、このようなことをした講義がなかったからかもしれないが、自分で自主的に調べ考察するということが即自分のものになったような充実感がもてた」(I. K)、「またよく図書館へ行って自分で自由に調べられたので他の講義に比べてとても楽しかった。内容については図書館にいて調べた分については、……いままでぼやーと頭の中で思っていたことが数字で実際に確認できて、より確かなものになったと思います」(W. Y)、「授業中に何度か図書館に行き、資料を自分で調べる作業があった。私はその時初めて書庫というものがあることを知り(恥しいことです)、書庫の中に入ってみた。本の多さにびっくりしました。自分が勉強しようと思ったらこんなに本があるのだからいくらでもできるんだぁーと思った。私が調べた資料は明治のものだったが、細かいところまで詳しい数字で書かれてある。とても貴重なものだと思う。そういう資料を実際自分で手にしてみても調べることができてとても良かったと思う。一人ではなかなかできないことなので」(O. M)、「昨年もそうだったのですが、この半年、経済学の授業は図書館によく行ったなあという印象があります。自分で調べるということは自分で疑問を持ち、自分で確かめていくことだと思います。私はもっぱら就学率のことばかり調べましたが、各地域の差だとか、年齢の差だとか、自分で予想したのが当たったり、はずれたり、おもしろい時間でした」(H. H)、「明治5年には地租改正、徴兵令、さらにわが国最初の近代の学校

制度に関する規程であった学制が施行された。これ以後、教育もどんどん新しい法令が出、整備されていく。図書館の資料を見ても、だんだん学校が増え、就学率も高くなり、卒業する者も増えているのがわかる。岡山県だけを見てもしっかりである。実際の資料を図書館で見る、自分で見るということは非常に勉強になったと思う。また、自分で見て調べたことやわかったことなどをレポートにまとめる、というのも資料を理解する上でとてもよかった」(H. Y)、などなどまで、新鮮な体験であったことを記している。

図書館での資料にもとづいた実習的学習の具体事例をあげるとつぎのようである。

O. H

第1回め 第24回帝国統計年鑑(明治38年刊行)により、尋常小学校の就学率の男女差・地域差。教員あたり児童数の地域差、教員の男女別差異。

第2回め 第8回帝国統計年鑑(明治22年刊行)により、同様のことを検討。

第3回め 明治37年岡山県統計書により、学齢児童数、不就学者数の地域別差異、不就学者の男女別を検討。第3回めの1項では、岡山市と郡部における1戸あたり児童数の差異を想定し、2項では、子沢山の農村では貧しく、こどもも労働を強いられる農村の苦しい状況を想定し、3項では男女差の歴然たる状態から、女子が学校に行けないことを想定している。

H. H

第1回め 明治31年について就学率の府県別比較。

第2回め 33年について同様のこと。

第3回め 岡山県について、大正9年の郡別比較。

F. E

第1回め 欠席。

第2回め 明治31年について、就学率を追っている。岡山県に焦点をあわせ、全国より就学率の高いこと、男女差の小さいこと、転じて、女子の就学率の低いこと

は東北諸県、沖縄県であることをみている。さらに、明治35年には就学率が男女ともに90%以上となっているが、「31から35のうちにどのような変ぼうをとげたか興味あるところである」としている。

第3回め 前回の岡山県が特に女子の就学率の高かったことと関連させて、大正12年について岡山県の女子教育についていろいろ検討している。

以上のようなことをそれぞれがして、講義で述べたことを自らとらえてみるということをしている。そしてこの過程で多くのことにふれていく。

ここで学生たちが使用したのは、『帝国統計年鑑』、『岡山県統計書』である。ともに教育の箇所を利用している。1回めには、『帝国統計年鑑』を一人ひとりに1冊ずつ手渡して、それにより作業をさせ、2回めは前回との関連で任意の年を選ばせる。3回めは、岡山県について任意の年を選ばせる。このようなことができるのは、これらが所蔵されていること、それらが中央館に備えつけられていること、学生が直接手にできること、である。所蔵されていなければ不可能であることはいうまでもないが、所蔵されていても、特定部局の図書室などに保管されていれば使用し難い。また、書庫に入って手にしてみることができないとすれば、きわめて困難である。私がこのような授業ができるのは、このような諸点についての障害のない、利用者にとって使用しやすい図書館であるからである。大学図書館の在り方は、充実した授業にかかわる、きわめて重要なことがらであるが、本学の図書館は不備な点は多くあるが、学生に対して制限度は大きくなく、利用しやすい図書館となっている（この点については、拙稿「私にとっての岡山大学附属図書館」『岡山大学附属図書館館報』No.1 1985年11月 に記してある）⁽¹⁾。

それにしても、いままでこのように資料を調べて勉強するようなことがなかった、というようないい方があった。中学、高校を通じて、社会的事柄を対象とする科目の勉強は随分してきているはずであるが、それは記述されているものを覚えこむものとなっているのであろう。受験体制の弊害は明瞭で

ある。できあがっているかのようなものを教えこまれたり、要領よく、見事に、そこにはなんら矛盾がないように書かれているチャート式の参考書を手にしたというだけでは、社会科が好きになるはずはない。そして社会科がそうであるということは、ほかの科目も多かれ少なかれそうだとしたことであろう。このようなことを改めて感じた。そして、そうであるがゆえに、大学において具体的な資料や実態調査を教育の場に取り入れること、すなわち「自分自身で動いて知識を広めること」(I. K)を学ばせることがいっそう重要であると思われる。

③ レポートの課題

第三に、レポートそのほかである。

まず、夏期休業中の課題図書レポート作成については、それぞれがよく読み、内容を把握した上で、受けとったことを率直に記述している。その多くがイギリスの個性尊重の教育に感銘し、その制度的表現といえる複線型教育体系を提唱する著者の考えに共鳴している。もちろん、それはイギリスのことだとしているものもあり、教育のすばらしさにもかかわらず経済の発展が停滞的であることに問題を感じているものなど受けとり方は多様である。

この講義ではテキストを使用しなかった。しかし、たとえどのように工夫され、ゆつくり考えながら聴くことのできる講義であり、しかも学生たちが優秀であっても、講義だけでは受身なものにとどまってしまう。それを補うためにはよい書物を読まずことが大切なことの一つである。この授業では、内容とのかかわりあいでも初めにあげた書物を課題としたが、学生たちにとって刺激的であったということが、なによりもよいことであった。

④ 授業の進め方

つぎに対話的な進めかたである。それから授業の途中ではさむ雑談である。先に、コミュニケーションがあった、神立先生の雑談も楽しみにしていた、などとあったが、ほかにも、「人数が少ない講義であったので、他の授業とは違って何んともなく親しみやすい雰囲気での授業だった。先生の方もそれを

意識してかしないではわからないが、出席をとるついでに学生に個人的に『夏休みはどう過しましたか』などと質問したりして。100人近い授業だとそんなことはとうてい無理なことであろうけれど、人数が少なかったからこそ多少ではあるけれども先生と学生との会話がもてたのではないかと思う。個人的にいうと、私はそういった少人数の授業が好きで、授業中先生と学生とが話をするのはとてもすばらしいこと(?)ではないかと思っている」(M. M)，と記している。

なによりも少人数での授業であることが、対話的にすすめることのできる条件の一つであり、そうであるがゆえに、雑談も「雑」談に終らずに、他の観点からの談話として通ずるものとなるのである。大学に入ったら大いに勉強したい、そういう欲求を潜在的には強くもち、そしてそれを追求していくことのできる学力を十分備えた学生たちを、少人数で授業できるということは、教師にとってはなによりもありがたいことである。

(4) 授業に対する学生の姿勢

「……世間からは『典型的なモラトリアム人間』とうしろ指をさされながらも、非生産的な、直接には人間の生活の役には立たないと思われる分野の研究にたづさわるべくまずは大学院に進みたいと考えている私である。学校はたくさんの働きバチを生産するためにはじまったらしい。『ムダ』のない社会。物質的な繁栄を達成させるためにはたしかにそれも必要であったかもしれない。しかし、真に豊かな人間をつちかうためには、働きバチの幼虫を不当に競争させるだけの教育であってはならないと思う。私は自分が受けてきた教育に対して疑問をもってきた。かといって新しい理念を掲げるほどの力もない。そこで、せめてみずからは社会の『ムダ』となって、ひねくれてみようと考えているのである」(K. A)。「経済も教育も、人間の生活を豊かにするためのものであるはずなのに、我々はそれにふりまわされ、自己を見失いがちになっいる。そういう時代だからこそ、人間性というものを、もっ

とあらゆる場面からとらえ、考え直す必要があるのではないかと、この講義をうけて、深く考えさせられました」(O. H), 「それにしても、今後の日本の経済の行方を決めるのは私たちであり、私たちが教えるであろう生徒である。将来の日本の進路を正しく決められる人間を育てるためにも、国家のためではなく個人のための教育を目指していかなければならないと思った」(Y. Y), などと記している。一人ひとりが模索しつつあることを示してくれる。そして、「もう神立先生の講義はうけられません。なんだか、とても残念です。先生の講義にとっても興味もっていたので、これからも、おもしろい講義をつづけて下さい」(H. H), 「図書館などで、実際の数の移り変わりを自分で調べることは、ただ授業で教えられるより、実感がわき、あとまで残ると思う。だからこれからも図書館で調べることを続けていただきたいと思います」(F. N), 「最後に私は、とてもこの授業をきくのが好きでした。先生とこれでおしまいというのは、とても残念な気がします」(S. Y), 「後期はどのような講義になるのか知りませんが、できることなら知識を次から次へと覚えていくだけの講義ではなく前期のように先生にきっかけを与えてもらって、あとは自主的に勉強するような講義をしてくれたらと願っています」(W. Y), 「後期は、どんな授業をするのか、など全く知らない。でもきっと前期に劣らない授業になるにちがいない、と期待しておこうではないか」(M. M), と記している。授業に対する積極的な姿勢や期待をつよく感ずる。

この授業は、前半のみを担当したものであった。大学に入学した当初の授業であること(1. 2年次配当)、しかもやや特講的なB科目であったこと、そして主対象が教育学部の学生であったこと、そして後半に経済学そのものの講義が行われて、前半の不十分さをカバーしていただけるということを経済学そのもののみとして、講義の内容を、思いきって、最も関心の大きいことの一つであろうところの日本の教育に焦点をあわせたものとすることができた。また履修者が40名以内という理想的な人数であり、対話的な授業や図書館で

の資料をもとにしての実習的なものを取り入れた授業とすることができた。そして、この授業はなによりもテーマそのものが新しく設定したもので、授業そのものが新しい試みであった。このように、新鮮で、いろいろ工夫をこらし、そして一種の冒険心をもちつづけることのできた「経済学B」の授業であった。授業もまた一つの創造の場というならば、この授業はなにがしかの創造を模索した授業であったといえるであろう。

3 滲み出る学生像

大学の大量化にともなう学生の質の変化が指摘されて久しい。たとえば、『書齋の窓』No.337(1984・9)は「現代大学生気質を論ず—大学は大学たりうるか—」という特集をしているが、その一つ藤土圭三「“豊かな社会”の申し子」は、「私のように小規模の地方国立大学に勤務し、しかも女子学生の多い教員養成系学部の体験を基礎としての発言が、はたして今日学生の気質論となりうるだろうか。……地方大学からのケース報告としたい」というもので、「今日の学生は、大学キャンパスを、遊ぶところ、対人関係を体験するところ、きらくに暮すところとして考えている。勉強は、必要になったときずればよい。今は、大学受験のために、やり残したことを取りもどそうとしているのだという。学生は、友人関係・異性関係・スポーツなど、これまでにできなかったことにエネルギーを注ぎ、復元しようとする。このため、彼らは、学問に対しては無気力で、モラトリアムとなる。さらにすすめば、小此木啓吾のいうピータンパン症候群(……)となる。成人することを拒み、幼児のままでありたいと願う今日の学生の特質は、今後どのような経過をたどるのであろうか、注目に値する」と結ばれている。私の勤務するこの岡山大学も、藤土圭三氏の勤務校とは規模はちがうが同様に地方にある、しかもそこは海一つはさんでの至近の地にある国立大学である。そして、この授業は、教員養成系学部である教育学部を対象としたもので、履修学生のうち

男子学生は1割程度で、ほとんどが女子学生であった。このようにほぼ同様の対象についてのものであるが、1985年度の授業の整理・反省をしていて浮かびあがってくる学生の姿は、藤土圭三氏のそれとはまったくといってよいくらい異なる。ものごとを知りたい、知る力をつけたい、そのために勉強をしたい、というように学ぶことに対して強烈的な欲求をもっている。大学は学ぶところと考えている。また、自分自身をつくりあげること、よりよく生きることを模索している。そして、教師を目指す者はよい教師を目指し、そのもつ役割と責任についても明確な自覚をもっている。けっして、「成人することを拒み、幼児のままでありたいと願」っているという類のものではない。このような私の学生の姿は、私の授業に出ている学生について、授業を通じてだけのそれであるということかもしれない。まことに、校庭などみる彼ら・彼女らは、くったくなく、たわいなく、そして、たよりなげである。しかし、そのような彼ら・彼女ら、そして「大学キャンパスを遊ぶところ」「学問に対しては無気力で、モラトリアム」ときめつけられている学生が、まぎれもなく、少なくとも授業のときにはこのような姿をみせるのである。かく見たのは、私が人間の観察・研究を専門とするものではなく、したがって、不十分な見方で見ているということかもしれない。しかしながら、私が得た学生像は、この小論で引用した学生たちの叙述から私でなくとも導きだすことのできるものである。いずれにしても、両者のあまりにも大きいこの学生像の差異は何に由来するのであろうか、大変興味深いことである。

註

- (1) この「私にとっての岡山大学附属図書館」は、拙著『大学図書館図書資料論』（1996年 御茶の水書房）のまえがきに全文掲載してある。なお、附属図書館を授業で活用していることの一例として同書第7章近代地域史研究史料としての府県統計書—大学図書館備え付けの意義—がある。